
が い か い の ち
崖 下 の 生 命

S G M

その不思議なお店に行ったのは、もうはるか昔のことだ。

あれは、大学二年生の夏休み。私はひとり瀬戸内海の島を巡る旅に出かけた。

瀬戸内海には大小あわせて三千ちかい島があるといわれ、有人島だけではなく、無人島や数メートルしかないような小さな島もある。

その島に行きついたのは、島巡りをはじめてから四日ほど経った頃だったと思う。島民が三百にも満たないような、小さな島だ。私は住宅がばらりばらりと立ち並んでいる地区を避け、なるべく人がいない山のほうへと歩いていった。草深き道なき道を掻き分けながら進んで行く。

それにしても暑い。

少し湿り気を帯びた地面からは、むっとする草いきれがこみ上げ、頭上から

は蝉せみの音が降り注ぎ、全身を汗がたらたら流れていく。

十五分ほど歩いたところで、急に視界がぱつとあけた。そこは、瀬戸内の大海原を一望できる、断崖絶壁であった。柵や手すりといった人工物はない。

足を滑らせば、一巻の終わりだ。

そんな辺鄙へんぴなところに、そのお店はあった。それは断崖の近くにひっそりと、まるで人目を避けるように建っていた。私が来なければ、永遠に人に知られることはなかったのではないだろうか、そんな考えが脳裏かすを掠める。

その建物は不思議な形をしていた。建物の中ほどがやけに括くひれていて、数字の8にも見える。いや、もつと的確なものがある。それはまるで……。私は、おもむろにその不思議な建物に歩み寄って行った。

それは木造モルタルの二階家であった。おそらく海風によるものだと思うが、

ところどころ腐食ふしよくしており、モルタルが剥落はくらくしていた。一瞬、廃屋かとも思つたけれど、建物の周囲の雑草などは丁寧ていねいに刈り取られている。入口は木柱にガラス張りの両開き戸になっていて、無防備むぼうびに開け放あされている。中の様子は暗くてよく見えなかった。

私はゆつくりと扉のところところに歩み寄り、頭だけを建物のなかに突っ込んで、目を凝こらしてみる。冷やりとした空気が頬ほに触れる。思っていたよりも広めの室内には、簡易な木造の棚が無造作むぞうさくに立ち並んでいる。電灯などはなく、やけに暗い。天井近くに嵌はめられた矩形くけいのガラス窓から射す明かりだけが、唯一の光源であった。天使の階段のように射さされた光のなかで、塵埃じんあいが微かに反射しながら浮動うどうしている。

意を決し、入口の敷居またを跨ぐ。

部屋の中は異様なほど寂^{しず}かだ。しかし、まったくの無音というわけではない。流れている。なにかが流れている音が微^{かす}かにする。そして夏だというのに、室内は体じゆうが粟^{あわだ}立つほど寒い。

次第^{しだい}に目が慣れてくると、室内の様子がさらに分かるようになってきた。天井や棚にはあちらこちらに蜘蛛^{くも}の巣が張っている。とくに天井に張った大きな蜘蛛の巣の中央には、巨大な蜘蛛が張りついている。やけに肢^{あし}が長く、黄色がかった気味の悪い蜘蛛だ。まるで、無垢な旅人を餌にでもしよう^とと待ち構えている怪物のようだ。

「いらっしやい」

ふと、背後から声をかけられ、心臓が止まるほど驚いた。振り向くと、老人が立っていた。異様なほど背が高く、痩せた老人だった。エプロンの

ような作業用の前掛けを着ている。

「あつ……すみません。勝手に入っちゃつて」

「気にせんで。ここは店だ」

老人はそう言うと、私の脇を通り過ぎて、奥へと歩いていく。左手には大きな鑿のみのようなものを持っていた。老人が通り過ぎたあとには、灰ほのかに煙草の残り香が漂っていた。

「ここは、なんのお店なんですか？」

私は奥に消えていった老人に問いかけた。

「棚に置いているものが見えんかね」

私はそこではじめて棚に目を注いだ。薄うつすら埃ほこりが積もった棚には、砂時計が置かれていた。それも、夥おびただしいほどの砂時計だ。それは小指の先ほどの

小さなものもあれば、棚の横には私の身長と同じほどの大きなものまで。大小だけではない。すべての時計は技巧を凝らしていて、緻密な幾何学模様を彫っていたり、龍といった生き物を模していたりと様々であった。

「これは……すごいですね」

お世辞ではなく、本当にそう思った。息を呑む美しさとは、こういうことを言うのだらうと心から思った。建物に入ったときに聞こえていた流れる音は、砂時計の砂が流れている音だった。

「これは、ご老人が造られたんですか」

「ああ。全部な」

老人はそう言うと、奥のほうから出てきた。私のところまで寄って来ると、虫眼鏡を渡してきた。

「これで、私の手の平を覗いてごらん」

老人の言うとおりに、私は虫眼鏡で手の平を覗いてみた。老人の手の平には、砂時計が置かれていた。それは、虫眼鏡で分かるほどの、小さな小さな砂時計であつた。

「これは……。どうやって造つたんですか？」

「何度も失敗しながら、試行錯誤して造つたのだよ。半年はかかったね」

老人はにやりと笑う。

「でも、これで時間を計れるはかるんですか？」

「時間？そんなもの計らないさ」

老人はあつけらかんと言う。

「では、なにを？」

「うむ……」

老人は少し言葉に詰まる。そして、やや遠くに視線を遣りながら、

「生命いのちかな」

と言うと、得意げに笑うのであった。私は、この奇妙な老人の笑いに厭いやな感じは受けなかった。どちらかといえれば好感に近いものを抱いた。

「久しぶりのお客だ。いいものを見せてあげよう」

老人はそう言うのと、つと踵きびすを返し入口に向かって歩いていく。私が立ちつくしているとき、

「はやく尾おいてきなさい」

私は老人の後を追った。

老人は店を出ると、建物の裏に回って断崖の端に立った。私も老人の横に

怖々と立つ。激しい潮風が顔を打ち、鼻孔をくすぐる。

「あれだよ」

老人は荒れる海を指さして言う。覗きこんでみると、切り立った絶壁に波がぶつかり、白く泡立っている。

私は息を呑んだ。

その海面の底に、巨大な砂時計が置いてあったからだ。それは、おそらく数十メートルはあったと思う。巨大すぎて、砂時計の上部は少し海面から浮き出ている。荒れ狂う波濤が砂時計にぶつかり、激しく飛沫を上げている。

「あれは……」

私は言葉を失った。

しばらく、その異様な景色を眺めていると、少し心が落ちついてきた。横目

にやると、老人は満足そうに煙草を吹かしている。

「わしが造ったなかで、いちばん大きなものだ」

老人は言った。煙草の煙が風にあおられ、流れていく。

「これもひとりで造ったんですか？」

「もちろんだ。何度も失敗したがね。これは完成までに三年もかかった」

私は老人の顔を横から見る。陽に焼けた顔には、深い皺しわが幾重いくえにも刻み込まれている。いったい幾いくつなのだろうか、少し疑問に思った。私はふたたび海に沈んだ砂時計に目を遣る。

「それにしても……あれで、いったい何を計はかるんですか？」

私は老人に問いかける。

「うむ……」

老人は、吸っていた煙草を地面に捨てて、火を躡にじり消しながら言った。
「生命いのちかな」